



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

日本の壁 一白に宿るもの

vol. **25** | 季刊 **秋**
2012



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.25 | 季刊 秋
2012

表紙写真

愛知県西尾市からお母さんと一緒に来館してくれました。光るどろだんごの体験教室が始まる前に、窯のある広場・資料館を見学。「大きな土管をくったよ」。絵日記に思い出の一コマを描いてくれたでしょうか。

(2012.8.22)

撮影：加藤弘一

01 [特集] 日本の壁—白に宿るもの 左官職人、浅原雄三が語る

LIVE SCHEDULE

これからの催し

- 06 企画展 日本の白い壁—石灰が作り出す多様な世界
光るどろだんご全国大会
世界のタイル博物館コレクション
「ミントンのタイル 千変万化の彩り」 in 東京・渋谷ヒカリエ

LIVE REPORT

開催報告

- 07 ワークショップ 土と足で遊ぶアート体験 お別れ会
「夏の思い出BOX」をつくろう
光るどろだんごづくり体験者10万人達成
- 08 ワークショップ どろの遊園地～子どもは遊びの天才だ～
岡モータース モーターショー in 常滑
- 09 光るどろだんご大会2012
夜のミュージアムを楽しむ! テラコッタ“スウィーツ”ナイト
フォトコンテスト2012「私の好きなライブミュージアム」
入賞・入選作品決定

【特集】
日本の壁
—白に宿るもの
左官職人、
浅原雄三が語る

この道49年の左官職人、浅原雄三さん。手がけるのは、日本有数の文化財や茶室の壁の数々。数百年前の職人が魂を込めて仕上げた壁を、現代によりがえらせる。石灰、漆喰、日本各地で受け継がれた白い壁。自然を生かす知恵と、美しく見せる技が込められた日本の壁に、魅せられている。

常滑から*

24




左手の崖下に屋敷、右手がやきものによる土留め

草に覆われた焼酎瓶

多くの観光客が訪れる「やきもの散歩道」からとっておきのスポットを紹介する。小高い場所にある光明寺境内の南側の坂道を下って三差路を右に進むと、急に目の前が開けて、大きな屋敷の庭が飛び込んで来る。行く手の坂になった小道の下、数メートルのところにそれはある。広縁に沿って続く格子のガラス戸が太陽の光を受けてまぶしい。そのまま少し坂道を下るとやがて長い上りに転じる。右手の土手には、土管、だんま(窯を焚くときに使う大型の煉瓦)、角槽、焼酎瓶、屋根瓦などさまざまなやきものが土留めに使われている。かつて屋敷の庭が見通せたこの場所も今は庭木が大きく茂り、道の両側の木々も皆成長し、景色も少しずつ変化している。風にそよぐ緑豊かな木々に囲まれ、時間の止まったかのような屋敷や小道、やきものたちによって、坂の先の異次元に導かれるようで、いつも心惹きつけられる。

竹多 格 (主任学芸員)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

石灰、漆喰、日本の壁

——秋に始まる企画展は、「日本の白い壁」をテーマに、石灰がつくり出してきた多様な世界を体感してもらおうと考えています。漆喰の壁は、その最たるもので、浅原さんは屋号にも「しっくい」を冠していらっしゃいます。まさに日本の壁、漆喰を語るにふさわしい方ではないかと思ったりわけです。

浅原 三重の伊勢志摩から京都に来て、社寺建築の修復を手がける左官屋さんに就職させてもらったんですが、現場は二条城や三十三間堂、金閣寺に竜安寺と、まさに文化財で、それがもう、漆喰なんですわね。

個人的に好きでよく訪ねるのが、京都伏見の法界寺。平安時代後期のお寺ですが、別名、日野薬師さん。足利義政の正室、日野富子の一族の氏寺です。この阿弥陀堂は国宝ですが、本尊の周りにめぐらされた小壁は、漆喰の上に天女が描いてあって、一部修復は加えられているものの、どうもなしいところは昔のまま。これはすごいですよ。そんなことから、漆喰とのつきあいは深く、独立する時、屋号に「しっくい」とつけたらどうかと言ってくれた人がいました、こうなったわけです。

100年以上経っても真っ白です。

左官の腕が壁の表情をつくる

——漆喰の白い壁というのは、本当にインパクトがありますね。神社、城郭、蔵の白壁。年月を経ても変わらない美しさは、人を惹きつけます。

浅原 修復中の姫路城は、白鷺城と言われますが、屋根にも漆喰を使っていますから、まさに白鷺が羽を広げたように美しいですね。上塗りの漆喰は3回塗っているそうです。播磨の海から雨風が来るから、相当しっかりと漆喰でないとだめですね。

漆喰の白い壁と言っても、仕上げには、鏝こての扱いで「撫で」「押さえ」「磨き」など、いろいろな表情をつくることができます。それに昔の壁は、石灰が今のようなミル粉ではないので、石灰の粒そのものが表情をつくります。粒が糊といっしょに縮んだところに独特の表情がでる「パラリ壁」。陽があったると、真っ白な壁のなかでその部分が光を吸収するの、ものすごく柔らかい感じになります。京都御所、二条城、桂離宮の壁がこれです。3厘（注1）、4厘程度の粒、これが5厘、6厘だと粗い表情が

*注1 尺貫法における質量の単位。1厘は約37.5mg



©p.01～03撮影=木村羊一

法界寺

真言宗醍醐派の古刹。通称日野薬師。1051(永承6)年、日野資業が薬師堂を建立し寺となる。阿弥陀堂(国宝)の室内には阿弥陀如来像(国宝)が安置され、それを取り巻く長押の小壁に描かれた天人の壁画は、法隆寺金堂壁画の焼失後、日本最古のもの。重要文化財。創建時には、四天柱(写真右の柱)にも麻布を巻いて白土を塗り、それをキャンパスにして曼荼羅が描かれていた。

浅原さんが壁の修復を行った上善寺(京都市北区)本堂の前で。白壁は、漆喰のパラリ壁。(p.01の写真は、壁の細部)

——漆喰の材料である石灰石は、日本はもとより世界中で産出される、人の暮らしに欠かせない原料です。古代エジプトのピラミッドや万里の長城、古代ギリシャやローマ時代の遺跡にも使われた跡が見られるそうです。日本でも高松塚古墳の壁画や法隆寺などに使われています。

浅原 当初は大陸から仏教の伝来とともに来た貴重品ということ、寺院や宮殿に使われ、その過程で石灰に砂や糊、スサなどを混ぜて日本独自の塗り壁仕上げの材料である漆喰になってきたという流れがあるの、しっくいね。使ってみれば、雨風に強く、耐火性があることもわかってくる、これは重宝です。

——漆喰は一般的には白ですが、色を付けることもできるのですか。

浅原 基本は白ですが、東京の方では江戸黒。「粋な黒堀、見越しの松」と歌われたように、黒い漆喰も多いですね。川越の蔵造りの町並みがその例です。沖繩の漆喰、「ムチ」と言いますが、材料は土佐漆喰と同じで、糊を混ぜないので水に強く厚塗りができます。塗った当初はクリーム色ですが、2、3年経って空気を吸収すると、本当に白くなっていきます。もの自体も強くなります。だから高知城や岩崎弥太郎さんの生家の蔵は、

出てくる。まさに石灰の表情の出し方というのは、千差万別です。

——均一な美しさがないという壁もありますね。

浅原 「磨き壁」です。土・どろんこ館にもありますね。どこまでも「押さえ」でする仕上げです。静岡の奥浜名湖にある方広寺の本堂は、1881(明治14)年の大火の後に再建されましたが、壁がすべて磨いてあって、圧巻です。

——そういう漆喰壁の仕上げの流行りとか、地域性といったものはあるのですか。

浅原 その昔は、白といえば白土でした。でも原料となる石灰石の山は、九州から北海道まで日本のあちこちにあることがわかって、石灰石を焼く窯の技法が発達して石灰の生産が増えた。それにより漆喰仕上げが普及して一気に城郭建築が花開いたと聞いたことがあります。

——「白い壁」は、石灰の効率的な製法が確立して量産されていく、工業化のプロセスと重なるのかもしれないね。技術革新が「白い壁」を日本各地に広げた。

浅原 そうして左官の仕事が増えたことで技術も発達したんです。白い壁が大量につくられた時代には、いい左官職人がいたと思う。競争して腕を磨いて、誰にもでき

ない壁をつくるという自負を持って。そうやってつくられた壁が何百年という時を経て残るんです。

心に残る白い壁

—— 浅原さんは、数々の文化財の壁を修復されていますが、心に残る白い壁はありますか。

浅原 やはり京都御所ですね。紫宸殿しんげんのぐるりを、古い壁をこそげて中塗りからやりました。上塗りはバラリ壁です。昔のバラリ壁は、石灰の粗い粒が入っている。どれくらいの粗さかとルーペで見ると、ルーペにメモリがあるので大きさがわかる。そうやっていろんなことをしてみると、おもしろくなってくる。昔の壁から次々と発見があるんです。そこから学んで、挑戦していけば、左官の表現はいくらでも広がる可能性があると思っています。

御所でも二条城でもそうですが、今という仕様書が宮内庁に保管されています。どんな土を何貫目入れるか、石灰と糊の分量、どう練るか、職人は何人とか。だから、私たちもそれに基づいて材料をこしらえます。

—— 復元がすぐにはできないようになってるんですね。でも、今同じ材料が手に入るとは限らない…。

とはありますか。

浅原 重要文化財の京都角屋すまやの壁ですね。角屋は、江戸時代の京都最大の、公に許された花街、島原にあった揚屋あげや—料亭のようなところで、新撰組や幕末の志士たちも訪れた遊宴の場です。その一室「青貝の間」の壁を修復したんですが、ここは宮内庁のように仕様書がない。壁土の色はほとんど黒に近くて、昭和の時代に煤を払ったら、表面に細かい貝殻を螺鈿らでん状にはめこんで文様が描かれていることがわかった。まあ、贅沢さが半端じゃないつくりなわけです。調査しても、どんなふうにつくってあるかわからへんから、伊勢志摩の田舎からアワビをもらって、それで螺鈿のサンプルをつくったり、その貝はどんな糊で壁にくっついてるのか、電子顕微鏡で調べて、相性の良さそうな糊をいくつか試してみたり。土を探したり、材料をこしらえるだけでも大変な労力がかかりましたから、その分、仕上がったときは感動です。

角屋には、新撰組による刀傷が残る床の間もあるんですが、この土壁には、そういう傷はなく、昔の人は案外、美しいもの、人が熱意をもってつくりあげたものに対する敬意を持っていたのかなと思うんです。



京都御所 紫宸殿

即位式などの重要な儀式を執り行う最も格式の高い正殿。入母屋いもや松皮葺まつかわらの高床式宮殿建築

〈宮内庁京都事務所提供〉



姫路城

17世紀初頭の代表的な城郭建築。5重6階の大天守と3つの小天守が渡櫓わたりでつながり、幾重にも重なる屋根、千鳥破風ちどりやぶかぜや唐破風からやぶかぜが、白漆喰総塗籠造しろしじくそうぬりかごぞうの外装と相まって、華やかな構成美をつくる。1993年、法隆寺とともに日本初の世界遺産に。〈姫路市提供〉

浅原 そこで。石灰でも昔と今とでは生成の仕方が違います。昔と同じような窯を使っても焼く人によって、熱の入れ方は違う。スサも昔は和紙をたたいて紙スサにした。材料がいいですね。だから長持ちします。今その材料を揃えようとするともものすごく高くなる。そのへんのところはね、いかにして昔に近い材料を自分たちで探して、勉強して、負けないようにするか。

私はいろいろな土を集めていきます。ダンプを買って、あそこはいい土が出そうだと目星をつけた工事現場を回ります。京都には聚楽土くわくち、九条土くわじうち、浅葱土あさなづち、錆土さびちなど何十種類もの土があります。同じ聚楽でも採る場所によって色味が違ったりします。だからできるだけたくさん土を集めて、古い壁を修復する時に持って行って色を合わせるわけです。それできれいに修復できる。よく、「今はこういう壁はできない」という人がいますが、私は、左官であれば、昔の左官がやったことは、今の左官でもやれないことはないと思っています。

「ここにしかない壁」に、挑戦する

—— 今までの仕事のなかで、この壁はすごい、面白いという壁に出会ったこと



伊豆、松崎町の岩科学校の「鶴の間」もそうでしょう。入江長八が千羽鶴を描いた壁があるので、遊び盛りの子どもたちがいた小学校だというのに、きれいに残っている。人の気持ちは乗り移るくらいの勢いでつくられたものは、何百年経っても人の心に響くのではないのでしょうか。

角屋の当主は、「この壁は日本に一つだけ、ここだけや」とよく言っています。左官となった以上、ここにしかない壁の修復に挑戦するのは当然で、この上ない幸せだと思っています。

—— 白い壁をつくる時、浅原さんが、ここだけは譲れないという部分がありますか。

浅原 まずは、散りちり(注2)ですね。柱と白い漆喰がまっすぐであること。そして鏝この通し。「車撫くるまなで」と言って、鏝跡が丸くなるのは良くないです。正面からは見えなくても、斜めから光があたるとわかっています。だから土塀つちべいのように長いものは、いくつで通すか皆で話し合う。そうすれば斜めから見ても、反物へもののように線がきれいに出てくるんです。白は奥が深いんです。これから気をつけて見てくださいね(笑)。

岩科学校

なまこ壁で有名な静岡県松崎町に1880(明治13)年開校した日本で3番目に古い小学校。重要文化財。「鶴の間」は客室および伝統作法や裁縫などの授業に利用されていた和室で、名工、入江長八が手がけた138羽の鶴が欄間に描かれている。

〈重要文化財岩科学校提供〉



角屋 青貝の間

江戸時代、京都最大の公許の花街、島原にあった最高の格式を誇る揚屋。座敷、調度、庭のすべてが杜寺の書院、客殿と同等のしつらいがなされ、揚屋建築の唯一の遺構として国の重要文化財指定を受けている。「青貝の間」は接客用座敷の一つ。

現在は公益財団法人角屋保存会が、建造物と美術品等の保存と活用を行い、あわせて「角屋もてなしの文化美術館」を開館している。

〈公益財団法人角屋保存会提供〉

